

新年あけましておめでとうございます

園長 山中 文

新年早々、大変な災害や事故がありました。まだ北陸では余震が続き、厳しい寒さも加わっています。今年は、辰年です。竜がかけめぐって、良い方向にむけていてくれることを祈ります。

毎年、年頭には、その年の干支の動物の絵本を話題にしていますが、今年の龍の逸話や絵本はたくさんありますね。『龍の子太郎』（*作：松谷みよ子作、絵：田代三善、講談社）や『りゅうのめのなみだ』（*作：浜田広介、絵：いわさきちひろ、偕成社）などのお話は、よく聞かれるお話かと思います。どちらも、人間の子どもが登場し、ある思いや事情から龍を探していきます。龍は子どもとのつながりから山を砕いて水を通します。龍は人間に恐れられたり疎んじられたりするものでありながら、子どもがその関係を変え、新しい状況をつくりだしていった様子が描かれています。大人も、子どもの素直にもものを見る力をあらためて振り返ることができるお話かと思います。ぜひお子さまと一緒に読んでみてはいかがでしょうか。

さて、竜といえば、音楽の世界でも龍にまつわった謂れがあります。

雅楽には、龍笛（りゅうてき）という横笛があります。雅楽では、この他の吹きものに、箏（ひちりき）という主に主旋律を担当する縦笛と、笙（しょう）という珍しく和音を奏でる笛があり、これらと龍笛をあわせて三管と呼ばれます。箏は、音を出すのはとてもむずかしいのですが、18cmくらいの小さな笛なのに、驚くほど大きな音が出ます。なんでも、これは、人の声とか地上の音を表すのだとか。主に主旋律を担当しています。それに対して、龍笛は、天と地の間を飛ぶ龍の鳴き声を模しているといわれ、なかなかカッコいい役割の楽器です。主旋律の箏の音色を彩るように吹かれます。さらに、すごいのは、笙かもしれません。吹いても吸っても、高さの異なる音が複数一度に鳴る、珍しい楽器です。音色は柔らかく、天からの光とか、天の声だとかに例えられ、全体的に音を包むように鳴らされます。それらから奏でられる音楽は、天から差し込むやわらかな光の中に、地上の声が聞こえ、その間を龍がかけめぐっている、という様子をあらわしているということです。先人の音の感覚には、驚かされることです。雅楽は子どもにはなじみのない音楽ですが、耳にされたら、この謂れをお子さまとお話しになってはと思います。

*この二つのお話は、この出版社以外からもいくつか出版されています。